

## 【ポスター発表】

## 学び支え合う関係としての「相互支援システム」

- とくに精神障害を経験している人たちとのかかわりに焦点を当てて -

淑徳大学大学院 梅原 芳江 (008056)

キーワード：精神障害者・グループワーク・「相互支援システム」

## 1. 研究目的

本報告は、地域で生活している精神障害を経験している人が実際どのように生活し、どのような生活のしづらさを抱え、どのような人生を歩んでいくのかという問いに端を発するものである。報告者は以前、精神病院に入院する患者さんや地域で生活する精神障害を経験している方、また多くの当事者が参加するフォーラムで出会った方から「働きたいけど働けない」、「一人暮らしがしたいけどできない」、「居場所がない」、「もう一度、勉強がしたい(けど、できない)」、「友達が欲しい(けど、作れない)」などといった声を聞いた。

こうした、精神障害を経験している方々の声は人間誰もが願う共通の「夢と願い」であると同時に、しかしそうであるにもかかわらず、さまざまな事情が絡み合うなかで自らが望む行動を起こすに起こせない悲痛の叫びとしてみるができるだろう。彼らは本当にいついかなるときも「できない」人であり続けるのだろうか。彼らは何も「できない」存在なのだろうか。

本報告では主として、報告者自身がボランティアとして長年かかわりをもっているクラブハウス「サン・マリーナ」での活動とそこでのグループによるインタビュー調査を手がかりとして、われわれの精神障害を経験している人に対する視点 つまり、精神障害を経験しているということだけで何も「できない」人と決めてかかる視点 が、彼らの「できる」を妨げてしまっているおそれがあることを指摘する。

## 2. 研究の視点および方法

クラブハウス「サン・マリーナ」において実施されている、スタッフとメンバーとによる「相互支援システム」が具体的にはどういった支援関係であるのかを 報告者自身がクラブハウス「サン・マリーナ」にかかわることにより体験的にわかったこと、 報告者がクラブハウス「サン・マリーナ」に所属するスタッフとメンバーとに対してグループによるインタビュー調査をおこなったことからみえてきたこと、 精神保健福祉や人間関係に関する文献、の三つから探る。

## 3. 倫理的配慮

本報告は淑徳大学研究倫理委員会にて研究倫理審査を受け承認を得ている。また、グル

ープによるインタビュー調査の箇所に関しては調査を受けたスタッフ・メンバーの氏名をアルファベット表記することにより本人を特定できないように配慮してある。

#### 4. 研究結果

本研究をおこなった結果、以下の三点が明らかとなった。

まず第一に、クラブハウス「サン・マリーナ」において実施されている「相互支援システム」は、「自助グループ」と「ピア・カウンセリング」という二つの基本原則を運営基盤としており、これら二つの基本原則はたんに精神障害を経験する当事者たちだけのためのプログラムではなく、実は支援者であるスタッフと利用者であるメンバー双方がともに学び支え合うプログラムとなっているということである。いいかえれば、このスタッフとメンバーとが学び支え合う関係こそが「相互支援システム」という支援方法論なのであり、この「相互支援システム」が実現されることをとおして、結果的に当事者一人ひとりが尊重されることとなり、各自の「夢と願い」を叶えることにつながっているということである。

第二に、明らかとなったことは、報告者がインタビュー調査をおこなったことに基づくものである。インタビューのなかで報告者が「相互支援」について伺った際、あるメンバーが「経験が長いスタッフにはわからないことを聞いて、若いスタッフとは仕事を補いながらやっています」と応えていた。このメンバーが伝えたかったことは、わからないことが生じたときに、メンバー（利用者）だからスタッフ（支援者）に聞くということではなく、（相手が支援者であろうと利用者であろうと）そのわからない事柄を得意とする人に聞くということであろう。このメンバーの言葉は、クラブハウス「サン・マリーナ」において展開されているスタッフとメンバーとの関係が、スタッフとメンバーという役割で区分けしているのではなくて、スタッフとメンバーという役割を超えて（その場面その場面で）「できる」人が「できない」人に対して教えている関係であることを意味しているといえる。「相互支援システム」は、精神障害を経験する彼らの「できる」を誘発するきっかけとなっており、結果としてスタッフとメンバーとがともに生きることにつながっているといえるだろう。

最後に、学び支え合う関係としての「相互支援システム」は、スタッフとメンバーという単純な役割に基づく関係ではなく、そうした役割の垣根を越えて、ともにグループとして日常生活を送るなかでその人に何が「でき」て、何が「できない」のかを踏まえたうえでの、そしてそれぞれの場面に応じて「できる」と「できない」がそのつどそのつどに転換する関係であるといえるということである。精神障害を経験しているからというだけで「できない」人と決めてかかるのではなく、上記のような「できる」と「できない」がそのつど転換する「相互支援システム」の実践が精神障害を経験している人の「できる」を広げ深めることにつながることになるのではないだろうか。